

教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の
状況の点検及び評価報告書
(令和7年度事業分)

庄内町教育委員会

令和8年9月

1 点検及び評価制度の概要

この報告書は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和 31 年法律第 162 号）第 26 条第 1 項の規定により教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況について点検及び評価を行い、その結果に関する報告書を作成し、これを議会に提出するとともに、公表しなければならないことに基づき作成するものである。

2 点検及び評価の手法

外部評価を行うこととし、下記の学識経験を有する者の知見の活用を図るものとする。

第一次外部評価	学校教育	実務的専門家	齋藤 直英	庄内町茶屋町
	社会教育	実務的専門家	足達 祐司	庄内町茶屋町
第二次外部評価	総括	学問的専門家	小野 英一	東北公益文科大学

3 点検及び評価の対象

「庄内町教育振興基本計画」及び「庄内町教育委員会の重点と視座」に基づいた学校教育と社会教育の施策及び事業

4 外部評価の内容

以下報告書のとおり

令和 7 年度分 庄内町教育委員会【学校教育事業】外部評価報告書

齋 藤 直 英

○ はじめに

本報告書は、各校(園)から報告された経営評価資料等を教育委員会関係者が集約した資料を基に実情を把握し作成した。

評価にあたっては、令和 7 年度学校教育「重点と視座」(施策の柱)の 9 つの基本方針から、評価の視点として基本方針 1、基本方針 2、基本方針 4、基本方針 5、基本方針 6、基本方針 7、基本方針 9 の計 7 つについて、成果と課題が顕著と思われる点について考察したものである。

1 「いのちを大切にし、よりよい生き方や志を求める教育の推進」【基本方針 1】

「地域とつながり、共に社会をつくる豊かな心の育成」【基本方針 2】

「健やかでたくましい心と体の育成」【基本方針 5】

「庄内町の良さを生かした魅力ある学校づくりの推進」【基本方針 6】

(1) ふるさと教育の推進について

○「庄内町教職員アンケート調査」より

町の自然・歴史・文化を学び、豊かな心を育む計画的体験の達成度 ・・・庄内町教職員の AB 評価の割合 (%)								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
幼稚園	94.8	94.8	82.4	95.6	100.0	95.6	95.6	0.0
小学校	94.6	78.9	81.8	87.5	87.9	97.7	94.1	-3.6
中学校	100.0	100.0	92.9	92.9	85.7	92.4	100.0	7.6

小学校で若干低下が見られたものの、幼稚園では現状維持、中学校ではかなりの向上が見られ、昨年度以上にコロナ禍以前の水準に戻りつつあるといえる。各教育機関において、コロナ禍の教訓を生かしつつ感染防止等に十分配慮した上で工夫を重ねながら実践されてきたことがうかがえる。本町教育委員会始め、各教育機関関係者の方々の取り組みに感謝したい。

- ◇ 昨年度も記載したように「with コロナ」から「after コロナ」の社会となり、これまで積み上げてきたものを土台に据えながら、今後、更に工夫・配慮を加え実践されていくことに期待したい。そのことが児童・生徒の心にもふるさと庄内町の魅力や愛着を根付かせ、持続可能な社会の構築の一助になっていくものと考えている。

○「庄内町教職員アンケート調査」より

庄内町を教材化し活用する、カリキュラムマネジメントの推進 ・・・庄内町教職員の AB 評価の割合 (%)								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
幼稚園	89.5	89.5	88.3	65.2	58.5	78.3	82.6	4.3
小学校	70.2	100.0	84.8	82.5	78.8	86.1	88.2	2.1
中学校	85.7	85.7	85.7	78.5	71.4	84.6	88.2	3.6

幼・小・中全ともに前年比プラスということで向上が見られた。前項目同様、各教育機関において取り組みの推進状況がコロナ禍以前の水準に戻ってきたようである。

「after コロナ」の社会情勢の中、幼・小・中それぞれにおいてカリキュラムマネジメントの取り組みが鋭意推進されてきたことがうかがえる。

- ◇ 「郷土への誇りと愛着」を育みながら持続可能な庄内町を構想していくために、「ふるさと教育」に関するカリキュラムマネジメントへの更なる取り組みが推進されていくことに期待したい。

(2) 相手を思いやる心の育成について

○「庄内町教職員アンケート調査」より

相手の立場に立って思いやる心の育成・・・庄内町教職員のＡＢ評価の割合（％）								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
小学校	100.0	100.0	90.9	97.5	93.9	86.1	97.0	10.9
中学校	92.8	100.0	100.0	92.9	100.0	100.0	100.0	0.0

中学校では３年連続１００％達成であり、小学校でも１０％以上のプラスという素晴らしい結果だった。

昨年度同様、この結果を学習状況調査の「先生がよいところを認めてくれる」という質問項目と照らし合わせてみると、昨年度低かった小学校の集計が全国平均レベルまで向上していた。児童の良さを把握し認める取り組みが浸透しつつあることが推察される。加えて、学習状況調査の「学校に行くのが楽しい」という質問項目への回答は小・中学校共に県・全国平均を上回っており、こうしたことが児童・生徒の「自己存在感」や「自尊感情」の醸成につながっていると考えられる。

- ◇ 毎年のように記載させてもらっているが「自尊感情が豊かな人は、まわりの人を思いやることができる。」と言われている。児童・生徒一人一人が「自己有用感」を持ち、「自尊感情」を育んでいけるように、学校生活の様々な場面で児童生徒一人一人の良さを認め、成就感・達成感を感じ得るような取り組みを増やしていくことが何よりも大切であり、それが思いやりあふれる集団の形成につながっていくと考える。

2 「一人一人の学ぶ意欲と確かな学力の育成」【基本方針４】

「健やかでたくましい心と体の育成」【基本方針５】

(1) 学校研究を生かした学力向上と授業改善について

○「全国学力学習状況調査」より(但しＲ２については「庄内町独自調査」)

国語、算数・数学が好き・・・児童生徒のＡＢ評価の割合（％）								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
小６国語	67.8	70.0	50.1	57.7	61.9	61.0	66.9	5.9
小６算数	59.9	63.9	66.1	56.1	51.7	49.3	54.0	4.7
中３国語	66.1	60.5	53.6	66.0	60.0	58.1	55.2	-2.9
中３数学	57.7	55.9	63.8	55.4	52.1	58.1	60.0	1.9

小学校の国語・算数においては前年度よりもかなりプラスだった。中学校では数学でプラスだったものの、国語ではややマイナスという結果だった。昨年度の小学校における国語・算数、中学校における数学の学習指導の中に、児童・生徒の「学習意欲を喚起」する何らかのヒントがあったと思われる。児童生徒が「学習内容がわかる・学習が楽しい」と思えるような授業展開の方法等を今一度振り返りながら分析・検討し、共有化していく手だてを構築していきたいものである。

- ◇ 毎年のように記載してきたが、ここ数年の結果を振り返ってみると両教科共にプラス・マイナスの波が繰り返されており、高水準の数値を維持していくことが難しいことがうかがえる。学習意欲喚起のための方策であったり、授業展開の仕方であったりを再度検討し、共有しながら実践化していくことが必要と思われる。今一度「わかるようになるから楽しい」「できるようになるから楽しい」という原点に立ち返って、更なる授業改善に繋げて欲しいと願っている。

(2) 自尊感情の高まりについて

○「全国学力学習状況調査」より

自分には良いところがあると思う・・・児童生徒のA B評価の割合 (%)								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
小 6	83.6	85.0	75.3	73.1	81.0	78.7	87.0	8.3
中 3	76.1	86.6	71.7	82.1	85.6	85.6	86.4	0.8

小学校・中学校共に向上が見られ、本町教育振興基本計画の後期目標数値（80.0）を見事にクリアできた。今後この数値が更に向上していくことが「思いやりの心情育成」や「学習意欲の向上」に関して相乗効果が期待されるだけに、学校生活の様々な活動の中で児童生徒が「やりたいこと」や「得意なこと」を通して、心が満たされるような場面の一つでも多くしていくような取り組みを大切にしていきたいものである。

- ◇ 毎年記載させていただいていることだが、6年前に本町教育委員会が提唱してくれた「認め合う学級づくり」（共感的人間関係の構築）を更に周知いただき「間違いやできないことも認め合う温かい学級風土を授業を通してつくっていく」ということを大切にしていきたい。そうした集団づくりが子どもたち一人一人の自尊感情を育んでいくことに繋がっていくと考える。各学校での更なる取り組みに期待したい。

(3) 不登校児童生徒について

○「学校基本調査」より

不登校出現率・・・年間30日以上欠席した児童生徒の割合 (%)								
	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
小学校	0.3	0.3	0.2	0.3	0.7	0.5	1.9	1.4
中学校	2.8	4.1	2.9	3.1	1.2	3.9	3.6	-0.3

不登校については、中学校において前年比-0.3%と出現率が減少傾向であったが、小学校では前年比1.4%と増加傾向であった。この児童たちが中学校に進学した後、中学校での不登校増加が懸念される。

昨年度も記載させていただいたが、不登校出現率についても、その年度の児童・生徒によるところが大きいため増加・減少を繰り返すかたちになっている。不登校解消は、その原因も状況も複雑多岐にわたっているため、一朝一夕に解決することはなかなか困難と思われる。それでも小学校・中学校共に不登校解消のために誠心誠意取り組まれていることが推察される。今後とも不登校傾向減少のために未然防止・早期対応を心がけ、関係教職員が組織的に対応できる体制を万全にしておきたい。加えて、必要に応じて校外関係機関と連携しながら、丁寧かつ継続的に取り組みが展開されていくことを期待したい。

- ◇ 前述したように全国学習状況調査において「学校に行くのが楽しい」と回答している児童・生徒は、小学校・中学校共に全国平均を上回っており、心を前向きにしながら学校生活が送れている児童・生徒が増加していることがうかがえる。一人ひとりを大切にした各学校における取り組みが功を奏していると考えられる。

例年記載していることではあるが、不登校の原因として集団に起因するものだけではなく、個別的な要因によるものが増加していると思われる。近年、家庭的に様々な課題を抱えているケースが増えてきており、不登校解消のために学校単独で家庭に対応していくことが困難なケースも散見される。前述したように教育委員会はもとより家庭支援に関わる専門機関等ともしっかり連携を図っていく必要がある。

3 学校と家庭、地域が支えあうしくみの構築【基本方針 7】

(1) 家庭・学校・地域が連携した教育の推進について

○「庄内町教職員アンケート調査」より

地域社会が一体となって子どもを育てる体制づくり・・・庄内町教職員の A 評価の割合（％）						
	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	前年比
幼稚園	23.5	47.8	47.1	47.8	52.2	4.4
小学校	12.1	12.5	15.2	25.6	20.6	-5.0
中学校	28.6	21.4	21.4	23.1	35.3	12.2

R3 年度より評価項目の文言が変わり、評価割合も A 評価のみの数値となった。小学校では下回っているものの、幼・中共に前年度を上回る結果であった。B 評価（どちらかといえば当てはまる）まで加えると、幼稚園では 100％、小学校では 94.1％、中学校では 94.1％と大きく前年度を上回るという達成状況であった。保護者や地域の方々の声、教職員の自己評価からもそのことがうかがえる。コロナ禍以来、各教育機関において連携を工夫し、教育効果の維持・向上を図ることに尽力されてきた成果といえるのではないだろうか。

また、これまでも継続してきた共育（ともいく）を推進するための施策「地域学校協働活動推進事業」（小学校は図書館を中心とした学校支援活動と放課後子ども教室、中学校は夢サポート塾）、等の展開も功を奏していると考えられる。

(2) 「庄内町中学生夢サポート塾」について（余目中学校、立川中学校）

平成 27 年度からスタートした町主催の学習会である。「地域学校協働活動推進事業」を活用した本町独自先進的な取り組みである。町内外の教員 O B や大学生、地域住民、指導主事が講師として指導し、数多くの生徒が意欲的に学習に取り組んでいる。地域住民による学校支援の気運の高まりや講師になった地域民の有用感につながるなど大きな成果を上げており今後の継続が期待される。

4 学校教育を支える施設・教育環境の充実【基本方針 9】

教育支援員を始めとする人的支援や、緊急を要する施設・設備の修理等に迅速かつ手厚く対応してもらっていることに対する感謝の声が少なくなかった。反面、様々な教育備品（ICT 関連や指導書関連）の充実要望等に関する声も散見された。施設・設備、教育環境に関する要望に対しては、町教育委員会として年次計画に沿って実施しているものと承知しているし、将来を見据えた構想等との摺り合わせもあろうかと推察されるが、ぜひ可能な限り計画的かつ迅速に進めていただき、子どもたちにより良い学習環境を提供していただけることを期待したい。

- ◇ 「山形県公立学校における働き方改革」の取り組みがスタートして 6 年目。各園・各校においても取り組みが更に進捗してきていることが年間経営評価からうかがえる。本町においても学習支援員等の人的支援や教育関連業務の電子化等、教職員の業務負担軽減を図るべく施策が講じられている。今後、これまで以上に教職員が子どもたち一人ひとりに対応した教育活動に専念できる時間が確保されることを期待したい。

○ おわりに

- ◇ 令和 7 年度は、学校生活全般がほぼコロナ禍以前に戻り、これまで制約を受けてきた様々な教育活動を以前のように充実したものに取り戻すことができつつある。今後は、これまでの成果と課題を十分に検証し、庄内町の教育のめざす姿（第二次庄内町教育振興計画）をしっかりと共有しながら教育活動が営まれることを期待したい。

- ◇ 本町の教育振興基本計画は、令和 3 年度から後期計画がスタートし、7 年度をもって一区切りした。「庄内町らしさ」を盛り込み、本町が目指す教育の基本的な方向性や重点的に取り組むべき教育施策が明確に（数値目標として）示されている点は評価に値した。今年度からは、一次計画の成果と課題や社会情勢の変化等を踏まえた第二次教育振興計画に引き継ぐことになる。これまで以上に周知を図りながら、地域・学校・家庭が一体となって本計画の施策が推進されていくことを願うばかりである。

令和7年度分 庄内町教育委員会【社会教育事業】外部評価報告書

足 達 祐 司

○ はじめに

令和7年はクマの出没やクマによる人的被害の増大が深刻な状況となった1年であった。学校のみならず各施設や店舗、事業運営者など、人の命を守るための対策に迫られ大変なご苦勞をされたことと思う。今年に入ってから相変わらずその傾向は続き、予断を許さない状況になっている。「酷暑日」という言葉が誕生し、年々暑さを増す温暖化対策とクマ対策はこれからしばらく続くと考えられる。どんな場合でもそうであるが、社会教育事業を行うにあたって、まずは人命の安全が最優先ということが絶対条件であるという意識を常にもって取り組んでいただきたい。

教育委員会の計画訪問では、第三まちづくりセンター、第二まちづくりセンター、図書館の3施設に同行させていただいた。どの施設でも運営状況について資料を基に細部にわたって丁寧に説明してくださった他、職員の生の声を聴く機会に恵まれ、各館の運営やその成果と課題について理解を深めることができた。

このことに加え、さらに個別に職員や関係者から聞き取った情報等を踏まえながら、主に重点項目を中心に社会教育事業全体の考察を行なった。

1 地域社会が一体となり、主体的に紡ぎあう体制づくりの推進

(1) 「放課後子ども教室の推進及び支援」では、各まちづくりセンターや学校を拠点とし、地域の方々の協力のもと、集団活動をとおした体験活動等を行ないながら、子どもたちの居場所づくりに取り組んだ。人生経験豊かなサポーターの方々が子どもたちを温かく見守り、子どもたちにとって自由に遊べる場となっている。

ただ、児童数に対して指導に当たるサポーターの不足や高齢化、指定管理者への業務委託と社会教育課が実施主体の2本立てで運営している現状を、今後どのような見通しをもって進めるのかが課題といえよう。

2 町民が共に学び続け、生きがいをもてる環境づくりの推進

(1) 「絵のある図書館 本のある美術館」では、リニューアルイヤーとなった令和6年度同様、大勢の利用者が訪れている。令和7年度は、建築に関心を持つ県外からの来館者も多くあり、その方たちによる SNS 等での発信もさらに来館者を呼び込む結果につながったようである。庄内町の図書館が広く認知されるとともに、注目を集めているということだと考える。

また、インターネット予約サービスの周知を図ったことが、ウェブ予約の増加につながり、3月末現在で予約件数全体の半分以上を占めるという結果となった。しかしながら、AI等による検索が日常生活で常態化していることでレファレンスは以前より減少しているようで、そのことによる職員の所蔵資料に携わる機会の減少を危惧している。OJTを活用するなど、身近なところから職員のレファレンス力を高めていく手立てを検

討してほしい。

- (2) 「庄内町子ども読書活動推進計画（第三次）の推進」では、第三次計画を令和7年度まで2年延長し、さらなる『家読（うちどく）』の定着と深化に向けて取り組むこととなった。家庭や地域における読書習慣を定着させるうえで、当然のことながら、幼稚園や小学校、まちづくりセンターとの連携が重要となるが、これまでの成果と課題をきちんと押さえておきたい。

また、第四次計画策定に向けての準備も進められているが、デジタルコンテンツの多様化等が急速に進化する中『読書』をどう捉えるか、ということ課題としてあげていた。世の中の動きにアンテナを張りながらも足元をしっかりとみつめ、庄内町が本当に必要とする推進計画となることを期待する。

- (3) 「まちづくりセンター等が行う社会教育事業への支援と連携」では、令和4年度にスタートして丸4年が過ぎたが、どのまちづくりセンターも少ないスタッフで創意工夫を凝らしながら地域活動の拠点としての役割を担ってきた。

本町のまちづくりセンターはかつての公民館事業を中心に運営されてきたが、中央公民館の事業評価にもあるように、地域課題に合わせた事業の見直しが必要なのではないかと思う。令和8年度で5年を経過することに合わせ、人的体制の充実をどう図るかということと併せて検討の時期に入ったと考える。

3 庄内町の自然・歴史・文化を生かした体験の充実と共有化

- (1) 「国内交流事業による交流と自然体験の充実」では、南三陸町を会場にロケットストーブ体験や化石発掘体験、洋上巡りなど多彩な活動が行われたようである。このような行事を行うには、どうしても夏休み期間中でないと実施が難しいと思うが、年々夏の暑さは高まる一方で、熱中症対策が不可欠となる。当然のことながら、関係者は細心の注意をはらいながら計画、立案、実行と手順を踏んでいることと思う。

今後も、この交流事業のねらいに沿いながら安心・安全を最優先して実施されることを願いたい。

4 教育の土台は家庭教育であることを広め、地域と連携した家庭教育力の向上

- (1) 「関係機関と連携し発達段階に応じた家庭教育力の向上に対する支援」では、研修会や講座を開設しても対象となる子育て世代がなかなか集まりにくい現状のなか、学校や保育園が参観日等を活用して行う家庭教育講座は効果的であったことを受け、令和7年度は保育園・幼稚園・小学校・中学校と機会提供できたことは何よりであった。

まだ、すべての園や学校で活用しているわけではないようだが、今後アンケートを取り、保護者が必要としている情報や学習内容を把握し、研修の充実に努める予定であるとのことでその成果を期待したい。

また、図書館職員が子育て支援センターに出向き、事業の中で読み聞かせを行ったり、保護者に育児関係の新刊本を紹介したりと、本をとおした家庭教育も毎月開催されている。乳幼児期の読書を家庭教育の入門期にとらえ、親子のふれあいを大切にした活動として大きな効果が期待されることから、行政間の協力のもと今後も長く継続してほ

しい事業である。

5 交流を通して美しさや愛を育む文化活動の推進

- (1) 「部活動改革（文化）の推進」では、合唱部を響ホールで活動している「庄内ひびき合唱団アルエット」が、同じく吹奏楽部を「響愛－AC ウィンズクラブ」が、土・日の活動の受け皿として令和7年度中に移行が完了している。平日は学校で、土日は地域で生徒が活動できる体制ができあがった。学校、保護者、地域指導者の三者が連携を密にし、協力し合い、生徒にとって充実した活動が続いていくことを期待したい。

6 豊かな自然・人や施設を活かし、健康と生きがいをつくる生涯スポーツの推進

- (1) 「スポーツ協会、スポーツ少年団本部、学校との連携による、スポーツ指導者の資質向上と研修の充実」では、11月17日に中学校地域クラブ指導者等研修会を実施し、今後の地域クラブ活動におけるパフォーマンスの向上やけがの予防・ケアについて学んでいる。講演形式で行なったが実技も交えながらの内容であったため、参加者からは好評だったと聞いている。今後さらに、指導者がどのようなテーマの研修を求めているのか把握し、実のある研修会の開催に努めていただきたい。

- (2) 「部活動改革（スポーツ）の推進」では、現在「コメっちわくわくクラブ」が受け皿となり、陸上や卓球、バドミントンなど5種目の競技が、当初の予定通り令和7年度中に地域移行を完了した。関係するすべての方々のご理解とご協力を得られ、大変ありがたく思う。

しかしながら、担当者からは生徒数不足による競技団体としての継続の不安や、指導者謝金や受益者負担といった経費に関する課題も寄せられている。予算にかかわっては、町当局からの手厚い支援をお願いしたい。

- (3) 「『庄内町小中学生のスポーツ・文化活動ガイドライン』の着実な実施と必要に応じた見直し」では、町のスポーツ少年団本部と連携して、特に適正な活動時間の順守に重点を置き、子どもたちの健康面に配慮した活動がなされるよう指導者の意識づけに努めるとともに、職員が研修で得た内容の情報提供を行なった。現在、子どもたちがスポーツを行う上で、体罰や長時間にわたる活動等の行き過ぎた指導や熱中症対策など、指導者や保護者が留意すべき点が多々あり、ガイドラインの徹底が求められる。今後も指導者に対する研修を定期的、継続的に実施してほしい。

7 豊かな文化財の保全と継承の推進

- (1) 「歴史民俗資料館の今後のあり方についての検討」では、特に進展はなかったが、(公財)清河八郎記念館については、施設の老朽化や収蔵環境の悪化、来館者の減少、学芸員の不在等、管理運営面や施設面での様々な課題を抱え、解決を図るまでには至っていない状況である。補助金等を活用した対策を検討したいとのことであるが、早急な対応をお願いしたい。

また、かねてより進めてきた「清河八郎」大河ドラマ誘致にかかわって、関係団体と連携してその推進に努めてきたが、カプセルトイやラッピングの自販機を設置したり町

イベントでグッズを展示販売したりと、少しずつその周知活動を広げてきた。さらに、町民の意識を盛り上げるとともにふるさとに対する愛着と誇りを高め、誘致につなげてほしい。

8 社会教育職員の資質向上

- (1) 「社会教育事業に携わる者に対する研修機会の提供」では、まちづくりセンターとの定期的な情報交換の実施に加え、県の社会教育研究大会への参加も促している。現状として希望者のみの参加としている社会教育研究大会は平日開催のため、職員が全員参加することはかなわないのだと思うが、職員が入れ替わったところもあるため、計画的に参加を促し、なるべく多くの職員が研修できるよう配慮していただければと思うし、思いきって休館日にして、全職員を参加させることも考えてみたらどうだろうか。また、まちづくりセンターと定期的に行う情報交換は、当事者どうしの貴重な学びあいの場という意識を持って参加することで実りある研修の機会となるだろう。

9 社会教育を支える施設、設備の充実

- (1) 「武道館の整備計画の推進」では、令和7年度から工事が始まり、令和8年11月竣工（予定）に向けて現在も順調に進んでいるとのことであった。少しずつ外観が形作られてきており、利用を待ち望んでいる住民にとって期待するところ大であろう。剣道や柔道、空手といった武道の活動拠点としての役割はもとより、武道の普及を担う施設としての活用になってくれることを願っている。

○ おわりに

昨年度川西町を会場に行われた、山形県社会教育研究大会の第2分科会において、「学習機会・学習環境の充実」の研究テーマのもと、庄内町が「小さな図書館の『チャレンジ』～庄内町立図書館の取組み～」と題して発表を行なった。わたしも社会教育委員の一人として参加させていただいたが、発表者は日頃どのような思いを持ち、どのような取組みを積み上げてきたかを、短い時間の制約の中、具体的な例を提示しながら実に分かりやすく発表していた。その中で、どんな図書館を建てたいかではなくその図書館で何をしたいのか、マナーと寛容が同居する快適空間としての図書館、これからの司書の役割としてのにぎわいの創造、といったキーワードが印象的だった。助言者からは、町民の学びの場・第3の居場所として公共施設の複合的な機能を持たせている、ハード面（環境）とソフト面（イベントの企画）を中高生ボランティアの活用等を図りながら両輪を結びつけている、と高く評価された。ある作家が自身の著書の中で、「図書館は未来の種を蒔いてくれるところ」、と語っていた。図書館の本を種に見立て、多くを蒔いて多く芽吹かせ、間引き、強い苗が育ち収穫（知の所産・生きる上での指針）につながる、とわたしなりに解釈してみた。町立図書館の取組みが、まさにそのことを指しているように思う。

最後に、2年前の外部評価で提案した、まちづくりセンターのトイレの全面洋式化が、令和7年度中に完了した。利用者からは喜んでもらっているということで、大変ありがたいと思う。町当局の迅速な対応に感謝申し上げたい。

本外部評価は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条に基づき、毎年教育委員会の権限に属する事務の管理・執行の状況について点検・評価を行うものである。評価対象は「庄内町教育振興基本計画」および「庄内町教育委員会の重点と視座」に基づいた学校教育と社会教育の施策及び事業である。点検・評価の具体的な方法については法定されておらず各教育委員会に任されている。庄内町教育委員会では学校教育と社会教育の二人の専門家に点検・評価をお願いしている。

庄内町教育委員会における点検・評価の大きな特徴として、学校教育・社会教育に精通した二人の専門家が、教育現場に足を運び、関係者の声を聞き、現場と向き合いながら点検・評価を実施しているという点が挙げられ、こうした基本姿勢は高く評価される。引き続き教育現場を重視し、また教育行政と教育現場の連携・良好な関係を維持されていくことを望みたい。

評価全体についてであるが、全体として高い評価を受けていると考えられる。個別にはいくつか課題も挙げられているが、ぜひ評価結果、特に課題として指摘された点については真摯に受け止め、可能な限り対応していただきたい。なお、足達先生から「2年前の外部評価で提案した、まちづくりセンターのトイレの全面洋式化が、令和7年度中に完了した。利用者からは喜んでもらっているということで、大変ありがたく思う。町当局の迅速な対応に感謝申し上げたい」とのコメントがあった。ここにみられるとおり、毎年、当評価での様々な指摘に対してしっかりと検討、対応していただいております、敬意を表したい。

齋藤先生からは「令和7年度は、学校生活全般がほぼコロナ禍以前に戻り、これまで制約を受けてきた様々な教育活動を以前のように充実したものに引き戻すことができつつある」「**「with コロナ」**から**「after コロナ」**の社会となり、これまで積み上げてきたものを土台に据えながら、今後、更に工夫・配慮を加え実践されていくことに期待したい」との指摘があった。教育現場を含め社会全体に大きな影響をもたらした新型コロナウイルス感染症であるが、現在は**「after コロナ」**の段階へと移っており、**「after コロナ」**の社会に応じた学校教育・社会教育が期待される。

足達先生からは「令和7年はクマの出没やクマによる人的被害の増大が深刻な状況となった1年であった。学校のみならず各施設や店舗、事業運営者など、人の命を守るための対策に追われ大変なご苦労をされたことと思う。今年に入ってから相変わらずその傾向は続き、予断を許さない状況になっている。『酷暑日』という言葉が誕生し、年々暑さを増す温暖化対策とクマ対策はこれからしばらく続くと考えられる」「人命の安全が最優先ということが絶対条件であるという意識を常にもって取り組んでいただきたい」との指摘があった。近年社会問題となっている猛暑やクマ出没への対応は、学校教育・社会教育においても大きな課題となっている。これらは人命や安全に関わる重要な課題であり、ぜひ最新の情報・専門的知見を把握しながら最善の対応を採っていただきたい。

齋藤先生からは「今年度からは、一次計画の成果と課題や社会情勢の変化等を踏まえた第二次教育振興基本計画に引き継ぐことになる」「今後は、これまでの成果と課題を十分に検証し、庄内町の教育のめざす姿（第二次庄内町教育振興基本計画）をしっかりと共有しながら教育活動が営まれることを期待したい」との指摘があった。今年度からいよいよ第二次庄内町教育振興基本計画が始まったところであるが、引き続き当計画のもとで、教育行政と教育現場の連携により諸課題を乗り越え、庄内町の教育をさらに高めていっていただくことを望みたい。